

底魚資源調査（夏季）を実施しました

水産試験場では、本県沖の主要な底魚類の資源動向を把握するため、平成15年から調査船いばらき丸（179t）により年2回（夏季、冬季）の着底トロール調査（オッタートロール）を実施しています。本調査では、本県沖の水深75～450mまでの海域、合計29定点において、15～30分間（速力3～4ノット）網を曳き、面積密度法により本県海域の現存量を推定しています。今回は令和5年7、8、9月に実施した夏季調査結果についてお知らせします。

1 主要な底魚類の推定現存量の推移

平成25年度から今年度までの現存量の推定結果を表1に示しました。また、参考として、県で資源評価を行っている魚種については資源水準も記しました。直近5年間の推定現存量の推移を元に、漁獲対象種の推定現存量の増減傾向（以下、増減傾向という）を判定した結果、増加傾向にあるのはアオメエソ（めひかり）やババガレイ（なめた）、ムシガレイなど8種、横ばい傾向にあるのはミギガレイ（にくもち）やチゴダラ（どんこ）、アカムツなど5種、減少傾向にあるのはアカガレイ（赤がれい）やマコガレイ（本まこ）、マガレイ（沖まこ）の3種でした。その他、漁獲対象とはなっていないトラザメ（ねこざめ）ならびにテナガダラ（とうじん）は減少傾向でした。

表1 推定現存量の推移（夏季トロール調査）

		(単位:トン)												増減傾向	水準※	過去10年平均
	魚種/年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5				
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ	45	48	52	127	71	64	45	27	23	28	48	増加	中位	53	
	ババガレイ(なめた)	77	71	53	96	79	70	49	25	17	52	77	増加	高位	59	
	アカガレイ(赤がれい)	4	5	5	109	29	10	1	2	1	0	1	減少	-	17	
	マコガレイ(本まこ)	5	5	16	29	26	19	50	14	18	5	6	減少	低位	19	
	マガレイ(沖まこ)	7	11	30	62	77	1	0	1	0	0	0	減少	低位	19	
	ムシガレイ	15	17	31	135	155	92	152	115	228	143	245	増加	高位	108	
	ミギガレイ(にくもち)	197	107	65	162	111	105	85	36	46	77	53	横ばい	-	99	
	ヤナギダコ(水だこ)	313	213	250	199	217	270	111	68	77	57	244	増加	低位	177	
	アオメエソ(めひかり)	409	69	48	312	193	260	57	110	160	191	585	増加	高位	181	
	チゴダラ(どんこ)	163	173	156	387	242	151	157	130	223	80	227	横ばい	-	186	
	マダラ	166	179	144	142	16	56	3	4	0	2	15	増加	-	71	
	アカムツ	2	25	21	22	23	14	24	15	13	13	23	横ばい	-	17	
	ユメカサゴ(のどぐろ)	22	29	26	32	111	189	78	30	37	70	79	増加	高位	63	
	キチジ(あかじ)	21	10	34	46	35	8	2	23	9	4	23	横ばい	高位	19	
	マアナゴ	5	49	34	48	31	35	19	26	20	7	23	横ばい	-	28	
マトウダイ	4	27	24	70	34	5	29	17	18	20	33	増加	-	25		
参考	トラザメ(ねこざめ)	1,616	777	1,119	960	1,603	1,231	1,629	1,027	1,077	385	290	減少	-	1,142	
	テナガダラ(とうじん)	977	1,389	6,559	1,126	907	1,113	2,116	340	1,210	1,937	507	減少	-	1,767	

※「茨城県産重要魚種の生態と資源」(令和5年3月更新、水試ホームページ)で報告している資源水準。-は未評価。

表2 今年度と昨年度の増減傾向の比較

2 今年度と昨年度調査結果の比較

今年度と昨年度（令和4年度）の調査時に行った増減傾向の判定結果の比較を表2に示しました。漁獲対象種の増減傾向を比較した結果、ヤナギダコ（水だこ）、マダラは減少傾向から増加傾向に、ヤナギムシガレイ、ババガレイ（なめた）、ムシガレイ、ユメカサゴ（のどぐろ）は横ばい傾向から増加傾向になるなど、9魚種で増減傾向の改善がみられました。また、増加傾向の魚種数は、昨年度は2魚種であったのに対し、今年度は8魚種となりました。逆に、減少傾向の魚種数は、昨年度は8種であったのに対し、今年度は3魚種となりました。

このような増減傾向の変化の要因は魚種によって異なるため、一概に述べることはできませんが、増加傾向となった魚種の漁獲量には期待が持てます。

水産試験場では、今後とも資源動向のモニタリングを継続していくとともに、資源の持続的な利用に向けての取組を実施していきます。

		魚種/年度	R4傾向	R5傾向
漁獲対象種	ヤナギムシガレイ		横ばい	増加
	ババガレイ(なめた)		横ばい	増加
	アカガレイ(赤がれい)		減少	減少
	マコガレイ(本まこ)		減少	減少
	マガレイ(沖まこ)		減少	減少
	ムシガレイ		横ばい	増加
	ミギガレイ(にくもち)		横ばい	横ばい
	ヤナギダコ(水だこ)		減少	増加
	アオメエソ(めひかり)		増加	増加
	チゴダラ(どんこ)		横ばい	横ばい
	マダラ		減少	増加
	アカムツ		減少	横ばい
	ユメカサゴ(のどぐろ)		横ばい	増加
	キチジ(あかじ)		減少	横ばい
	マアナゴ		減少	横ばい
マトウダイ		増加	増加	
増加合計			2	8
横ばい合計			6	5
減少合計			8	3

3 アカムツ小型魚の大量採集

アカムツは高級魚として知られ、日本海側では「のどぐろ」として有名です（ただし、本県の「のどぐろ」はユメカサゴを指します）。本県では主に底びき網（沖底・小底）で漁獲され、ここ10年ほどで漁獲量が増加しています（図1）。前頁の1で示した重量ベースの推定現存量では横ばいと判断されましたが、今回の調査においてアカムツの小型魚（全長5～8cm）が大量に採集され、尾数ベースの現存尾数を推定したところ、昨年度比で約4倍（613千尾→2383千尾）と大幅に増加したことが分かりました（図1）。小型魚は水深100m地点で採集され、全長20cm以上の個体はすべて水深150m地点で採集されました（図2）。小型魚を保護することで、アカムツ資源の有効活用が期待されます。

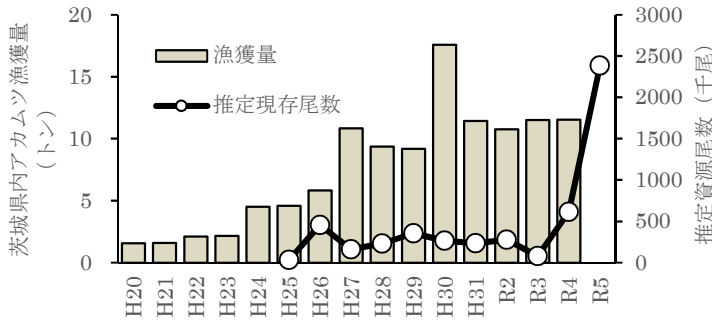


図1 本県におけるアカムツ漁獲量（属人、7-6月の漁期年集計）と底魚資源調査から推定したアカムツ推定現存尾数
 ※H24以前の推定現存尾数はデータなし
 ※R5は年度途中のため、漁獲量は未集計

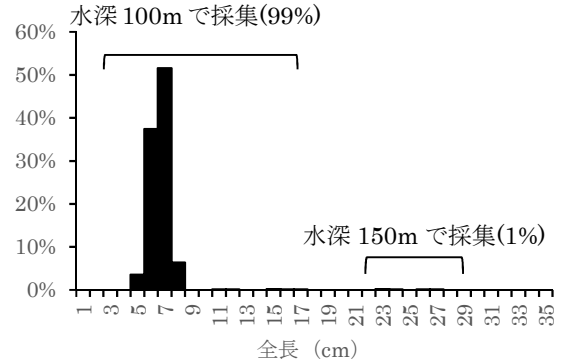


図2 底魚資源調査で採集されたアカムツの全長

4 アオメエソ（めひかり）

アオメエソ（めひかり）は本県では主に底びき網で漁獲され、平成23年ごろから推定現存量、漁獲量ともに増加しています（図3）。今回の調査で推定した現存量では、前頁の1で示したとおり、増加傾向と判断されたほか、平成20年以降最大の値（585トン）となりました。また、底びき網漁業の令和4年度漁期（令和4年9月～令和5年6月）の漁獲量は655トンであり、本県の底びき網漁業での魚種別漁獲量が最も多い魚種となりました（図4）。推定現存量、漁獲量ともに増加しているアオメエソの今後の動向に注目です。

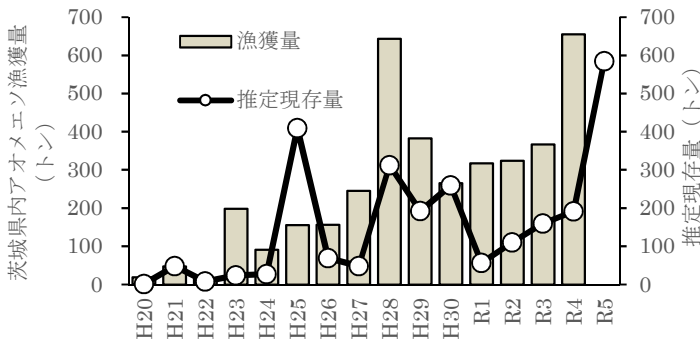


図3 本県におけるアオメエソ漁獲量（属人、9-6月の漁期年集計）と底魚資源調査から推定したアオメエソ推定現存量
 ※R5は年度途中のため、漁獲量は未集計

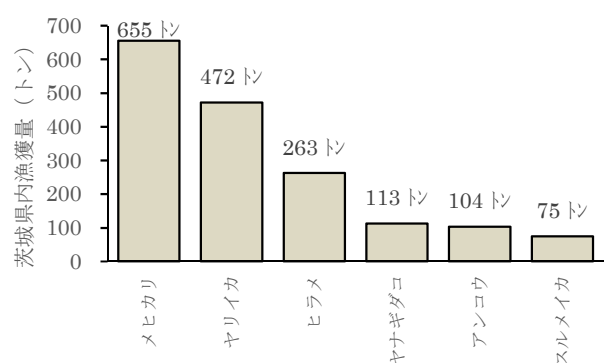


図4 本県における魚種別底びき網漁業漁獲量上位6種（属人、令和4年度漁期年集計）

（定着性資源部 多賀・浦本）

【次回予告】令和5年11月10日発行の水産の窓は「令和5年11月の海況と今後の予測」を予定しています。